

## 脱原発世界会議2012YOKOHAMA セッション報告書

■企画タイトル	「2030年の市民社会～みんなで描く、エネルギー・食・教育・メディアの未来～」
■日時	2012年1月15日(日) 16:45～17:45
■場所	3Fホール(301+302)
■企画参加人数	約600名
■企画団体	ピースボート
■文責	小野寺愛(ピースボート)
■登壇者	
竹村真一	京都造形大学教授、文化人類学者
枝廣淳子	環境ジャーナリスト、翻訳家
リカルド・ナヴァロ	元FoEインターナショナル代表、CESTA代表
小野寺愛	ピースボート(司会)

人口増加・異常気象・水不足・石油高騰…。変わり続ける世界の中で、私たちが守りたいものは何でしょうか。10年後、20年後に、私たちは、どんな社会に暮らしていきたいのでしょうか。「脱原発は可能だ」ということを確認するだけでなく、参加する1人ひとりがその先にある未来を描き、具体的に動き出すためのセッションを行いました。

まずは文化人類学者の竹村真一さんから、私たちの住む地球がどれだけ「好都合な真実」にあふれた星であるかをご紹介いただきました。

竹村：「太陽から地球に届けられるエネルギーの総量(約17万テラワット、石油換算で約130兆トン)は、人類が1年間に消費するエネルギーの1万倍以上あります。世界の風力発電のキャパシティは、2億キロワット。世界の原発400基の半分あります。太陽光も、日本の原発54基の発電容量をはるかに上回ります。3～4年で建造可能な集光型PVをサハラ砂漠6,500平方マイル(17,000 km<sup>2</sup>)の領域に敷き詰め、高圧直流送電でヨーロッパおよびアフリカ各国に送電する。こうしたグローバルなエネルギーの融通と、ローカルな自然エネルギー事業をセットで推進することで、ヨーロッパは2050年には100%自然エネルギーの社会を実現します。

”エネルギー枯渇”は、これまで私達の文明が未熟すぎたために、本来エネルギー問題など存在しないはずのこの惑星に、私達自身が創りだしていた人為的限界です。石油や原子力発電から自然エネルギーへの転換、新たな都市デザインへの移行には、私達一人ひとりが”地球のセンサー”となるネットワークの構築が不可欠です。もう、人間がおいてけぼりにされる、人間をばかにした社会をつくるのはやめましょう。道具の進歩ではなく、もっと人間の中のソフトウェアを増やす形で未来をデザインすれば、これまでになかった人類と地球の<共進化>もあるかもしれない。石油の枯渇や高騰にふりまわされないおおらかな文明を子ども達にプレゼントする準備は、すでにできているのです」

続いて、エルサルバドルで最大、もっとも歴史がある環境NGO「CESTA」代表のリカルド・ナヴァロさん。

リカルド：「20世紀、人間は100万人以上、人を殺しました。1日あたり、3000人です。1世紀の間ずっと、毎日911のツインタワー、毎月ヒロシマの悲劇を繰り返してきたのと同じ数です。そして、今も、アフリカの貧困と人権については誰も気にしません。石油がないからです。産油国のシリア、リビア、イラクには皆が口を出します。リビアにはフランスが介入し、一般人を50人殺しました。

そして環境。気候変動が進み、生物多様性が損なわれ、海は酸性化しています。ポツダム研究所によると、このままいけば今世紀末、地球の平均気温は5度上がり、生き残ることができる人類はわずか10億人。そんな社会背景を振り返り、今、私達ひとりひとりにできることは何でしょうか？

簡単です。1)世界に住むすべての人の権利と、生きるためのニーズを何より大切にする。そして、2)自然と共に生きる。この2つを、何を決めるときも原則にしなくてはなりません。この原則がまずあって、その上での技術論でなくてはなりません。

そのためには、何かを始める前に「そもそもそれは本当に必要なのか？」と既存のシステムを疑ってください。毎日、3600億ドルを軍事に使う必要が本当にあるのか？月に100万円も消費する生活を、本当に維持する必要があるのか？経済、政治、軍事、宗教…、社会のあらゆる場面に見られる権力の集中を、分散させましょう。中央集権型の権力には、マイノリティの意見を尊重することができません。大型のプランテーション農法は、農薬を使わない有機栽培には不向きです。軍事も解体しなくてはなりません。憲法9条を世界中の国々に広め、軍の役割を気候変動災害から人を守るためのものと切り替えていくことが必要です。

私たち1人1人にできることは、4つあります。抵抗すること(resistance)、知ること(awareness)、変革すること(transformation)、そして地域自治を進めること(local sovereignty)。まず、自分の地域に原子力発電所があれば、反対してください。中央集権型で、命を大切にしない発電法だから。そして、食・水・エネルギーをできる限り自分の地域で自給できるようになってください。地域経済に貢献してください」

最後に、枝廣淳子さん。等身大の視点で、参加者一人一人が今日からできることをご提案いただきました。

枝廣：「私は、ここ数年、ずいぶん買い物をしなくなりました。迷った時は、7年後にも自分はこれを欲しがらうか、と考えます。そして、3つの「脱」を提案します。

- 1)「暮らしの脱所有化」 借りる。共有する。車を所有せず、カーシェアリング。本やDVDも買わずに借りてくる。
- 2)「幸せの脱物質化」 物を所有することがブランドだった時代は終わり。それよりも、人や自然とのつながりに豊かさを見出す人が増えてきた。
- 3)「人生の脱貨幣化」 なんでも買うのではなく、できるものは自分で作る。「半農半X」、つまり少し農業をして、残りの時間で他の仕事をする人も増えている。

エネルギーと食でいうと、なるべく自立型の暮らしを目指したい。私自身は、早く東京電力の送電線から落ちたい。ほしくないエネルギーをまぜているので、できるだけ買いたくありません。そのためには、まず省エネで使用エネルギーを減らします。二重サッシなど、工夫できるところは工夫して、残ったエネルギーをできるだけ自然エネルギーに変えていく。マンションでもベランダに太陽光パネルをつけることが可能です。電力会社に任せて文句を言うのではなく、引き受けて考えるように変わっていきたい。農業も同じです。食の分野では「my食糧自給率」をあげたい。ベランダで野菜栽培をしながらも、自分で全部つくるのは無理だから、農家さんから継続して買っています。そして、教育。今の日本の教育は、大学のため、または企業に入る準備のためのもの。しかし、本当の教育とは、その人が幸せに生きるため、人生を切り開く力をつけるためのものではないでしょうか。私は、子どもがテストを持って帰ってきて、点数について気にしたり、怒ったりしたことはありません。いつも言うのは3つだけ。「テストのためにどう考えて、準備したの?」「その結果を自分でどう思ってるの?」「じゃあ次はどうする?」平均点と比べてもしかた

がありません。小さい時からこれを繰り返すと、自分で考えるようになります。こんな風に勉強したら?と親が介入すると、大きくなってもそのままの援助が必要になってしまいます。

最後に、「対話」の力について。グローバルな人間が2030年には今よりもっと必要になるでしょう。それは、単に英語ができるということではありません。多文化の人々と協力して、新しいものを創る力を持っている人。外のもの、違うものを排除して内側だけでやるという文化は乗り越えなければなりません。意見の違う人がいたとき、それを「敵」として論破するのではなく、意見が違う「仲間」と見て、一緒に考えていけるかどうか。原発に賛成か、反対か。自然エネルギーに賛成か、反対か。日本では、すぐに敵と味方に分かれて、遠くから石を投げ合っているような状態で、メディアもそれをエンターテインメント化しています。しかし、のぞましいエネルギーを創りたいのは誰も同じです。対話とは、結論を出すものではなく、関係を築くためにするものなのです」

会議終了後、個人にもすぐにはじめることができるヒントに満ちた60分でした。また、私たちが住む惑星の本来持ち得る可能性についても再確認できました。3人の識者を迎え、2030年、希望に満ちた市民社会を作るために必要なことを話し合った結果、浮かび上がった行動のキーワードは「ローカル:地域」と「対話」、そして、何が本当に大切なのか、既存の枠組みを問い直す姿勢でした。大きな拍手と熱気に包まれて終了したトークは、新しい市民社会のはじまりでもありました。



(写真:佐藤秀明)